

脳死6歳未満から肺移植

8歳女兒きょう退院

岡山病院 父親「命のリレー実感」

父親（左）と大藤チーフに見守られながら院内を元気に歩く
女兒＝10日午後3時15分、岡山大病院（代表撮影）



岡山大病院（岡山市北区鹿田町）は10日、今年1月、臓器移植法に基づき脳死と判定された6歳未満の女兒から提供された両肺を移植した女兒（8）＝関東地方在

住＝が11日に退院すると発表された。退院の前に、取材に応じた父親＝40代＝は「娘の歩く姿をみて、これが命のリレーなんだと実感した」と感謝を述べた。女兒は肺胞壁に炎症を起こし、ガス交換がでにくく

くなる特発性間質性肺炎と診断され、昨年10月に日本臓器移植ネットワークに登録。今年1月14日、同病院で7時間余りに及ぶ手術を受けた。手術の5日後には人工呼吸器の管が外れ、順調に回復した。

院内での代表取材に姿を見せた女兒は1人で歩き回り、執刀した呼吸器外科の大藤剛宏・肺移植チーフと指相撲をするなど元気な様子。自宅へ帰って何がしたかを問われ「自転車！」と即答した。祖父に黄色い自転車を買ってもらう約束をしているという。父親は「（提供者のことを思うと）複雑な思いがあるが、元気になるってうれしい。家族でいろんな所へ行きたい」と目を細めた。

会見した大藤チーフは「移植した肺で女兒が呼吸をした時はほっとした。肺移植法施行後、3例にとどまっていることに触れ「移植という方法で助かる命があることをより広く知ってほしい」と話した。

（伊丹友香）